

「おふでさき」第三号の七十三首は「十一に九がなくなって、しん忘れ、正月二十六日を待つ」とある。「十一」と「九」という数字の意味に関して種々解釈があるが、後日の「おさしづ」を参照して、歌の全体の解釈としてはほぼ一致している。すなわち、「おさしづ」によれば「正月二十六日」とは教祖が現身を隠された明治20年1月26日を指し、そのとき教祖は90歳、孫のたまへが11歳であったので「十一」と「九」とはそれぞれたまへと教祖を指していると考えられ、「十一に九がなくなって」とは「教祖が現身を隠されて」と解釈でき、さらに「九」が「苦」と同じ音であることから「苦がなくなって」とも捉えられる。そして「しん忘れ」の「しん」とは辛苦の「辛」と解されて、そのことから上の句は「苦がなくなって、辛を忘れて」と解釈されている。

続いて、「このあいだ、しんも付きくる、欲忘れ、人衆揃ってつとめを拵える」(三号74)とあるが、「このあいだ」とは三号執筆時の明治7年から明治20年までの期間を指し、この歌の「しん」は「しんのはしら」の「しん」で、「芯」と捉えられる。したがって、この歌は「明治7年から20年までの間に、芯も定まり、欲はなくなり、つとめを勤める人々を揃えて、その準備をする」と解することができる。以上からこの二首の大意は、「教祖が現身を隠すとき、苦がなくなり辛いことも忘れられ、そのような正月二十六日を待つのだが、その待っている間に、芯なるものも定まり、欲は忘れられ、人を揃えてつとめの準備に掛かってくれ」となる。

ところで、「正月二十六日を待つ」とは、文脈上「教祖が現身を隠すことを待っている」とも捉えることができるが、「現身を隠された」という事実だけを見ていると表面的な解釈におわってしまうだろう。「正月二十六日」について述べている「おさしづ」を読むと、この二首に込められている思いがよく理解できる。

その「おさしづ」は教祖が現身を隠された2年後の明治22年3月10日に高安大教会の初代会長の松村吉太郎が伺ったときの言葉であり、高安分教会(当時)の設置に関連したものである。明治22年の1月頃に突然左右の目尻を痛めた松村は再三「おさしづ」を仰ぐうちにその神意を悟り、教会設置を決心した。すると、両方の目の痛みは鮮やかに消えるという守護を頂く。その後、河内にあった講社を統一して高安分教会を設置することになり、設置願いにつき「おさしづ」を伺っているなかで、当の「正月二十六日」にふれるお言葉が登場したのである。

少し長くなるがその大意を記そう。「この道はじまってから今日まで、いろいろな出来事にも出会い、どんな道も通り、大きく変わる世界の状況に即して何かと理を説いてきた。その五十年以前からの道をよく考えてほしい。もともとこの世界は泥水であり、そこから神の守護によってこの世界と人間が始まった、その根本の理合いを聞き分けてほしい。人間の思わくによって始まったのでもなければ、人間の力で拵えたのでもない。まして、他のものを頼って相談したのでもない。だから、今日は晴天、今日は雨かと思っても、いずれも神の守護である

ということが分かれば、神の理は鮮やかに分かる。さあ、最初は難しく苦勞の多いところから始めた。世間の誤解から取り払えと言われた日も何度もある。取り消され、差し止められたこともある。さあ、かつて正月二十六日と筆に記して、実際に明治二十年陰暦正月二十六日に始め掛けた理を見よ。正月二十六日より、教祖が現身を隠して世界を平らにするために働き出したことと、取り払うと言われたことを併せて思案すれば、納得できるであろう。神が世界だすけに出ている。それは疑うことはないだろう。もし疑いがあるなら、尋ねてくるがいい。お前たちはややもすると神は姿やかたちの見えない幽冥なものと思うかもしれないが、そうではない。五十年前からの道を見て考えてみよ。もし姿や形が見えないという気持ちから嘘や追従があるならば、神はそのような心を嫌うのである。」

このように「おさしづ」の中では、「正月二十六日より教祖が現身を隠して世界を平らにするために働き出した」ということと、「世間の誤解から取り払うと言われた」ということを併せて考えるようにと述べている。教祖ご在世当時は、教祖の身を目標にして世間からの迫害や干渉が集中し、そのために神の世界だすけの道が「取り消される」という事態も度々あった。そこで、神はその道が遅れないように「正月二十六日」より教祖が現身を隠して世界だすけを進められたのである。したがって、「正月二十六日を待つ」というのは、「教祖が現身を隠して、世界だすけをなお一層進める日を待つ」という意味が第一義であると解することができる。

それでは、そのような世界だすけはどのようにして進められるのであろうか。それはつとめによってである。そうであるから、次の首で、このあいだ(執筆時から明治20年陰暦正月二十六日)までに芯を定めて、欲を忘れた人々を揃え、つとめの段取りを進めることを述べているのである。世間から「取り払われた」のはつとめの中心点(ぢば)を示すかんろだいであり、警察から「差し止められた」のはつとめである。そして、この「おさしづ」を伺った松村の懸案事項は教会設置であり、教会の第一義は「つとめを勤める場所」である。すべて一貫して「つとめによって世界をたすける」という態度が示されており、続く歌で「日々神の心が急いでいるのは、自由自在の守護を早くみせたい」(三号75)、「これからはつとめ人衆がそろってつとめをする、これでたしかに『にほん』が治まる」(三号76)とつとめを望む気持ちを詠われている。

そして、続けて、「真に、たすけ一筋であるから、恐れるものは何もない」(三号77)、「(それにもかかわらず)そのたすけを止めるならば、神の残念な思いがその者の身体の障りとなって現れる」(三号78)、「考えてみよ、あらゆる病気や悩みもすべてたすけるその準備は、人間の知恵や力ですることではない」(三号79)、「今までは、何もかもすべて分からないので、みんな人間の心で色々心配してきたのである」(三号80)と詠って、世間からの圧迫に崩折れがちな人間の心をはげまし、上に挙げた「おさしづ」でも、教祖が現身を隠して姿・形が見えない神を疑う人間の気持ちにふれて、神を「幽冥と思うな」と諭されている。